

サン＝サーンス
交響詩「死の舞踏」



チャイコフスキー
バレエ音楽「くるみ割り人形」から



チャイコフスキー
交響曲第4番

上越交響楽団

Joetsu Symphony Orchestra
73rd Regular Concert

第73回定期演奏会

2014年9月21日(日) 14:00開演
上越文化会館大ホール

指揮：長谷川正規

コンサートマスター：三溝健一

主催：上越交響楽団

後援：上越市教育委員会

本日は上越交響楽団の演奏会にお越しくださしまして、真にありがとうございます。今年は全国的に天候が不順で、全国で風水害、山崩れなどがしきりに起こっています。しかし上越地方は幸いながら何事も無く、オーケストラの演奏を聴いていただく事が出来ました。被害地域に申し訳ないと思うほどです。だから私達に出来ることは上越交響楽団として精一杯の演奏をすることだと思っています。

オーケストラと言うのは実に不思議な団体で、仕事思想信条宗教その他色々大勢の人が集まって一つの曲を演奏します。それぞれ忙しい時間をやりくりし、練習や本番を通して、音楽という時間を共有します。弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器、撥音楽器等、性格の違う楽器を性格や経験の違う大勢の人々が音を和する。そこにお客様も共有してくださる事が、週一回の練習と、年二回の演奏会の大きな推進力になっています。世界を見渡せば紛争や戦争しか見えない時代になって来ました。世界が平和になって欲しい、わずかな力になりたいと身近な所に有るいさかきも含めて感じている次第であります。

指揮者

Hasegawa Masanori 長谷川正規

東京藝術大学音楽学部器楽科にてテューバを専攻。学部在学中に安宅賞を受賞。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。

ソリストとして、松尾葉子指揮藝大フィルハーモニア、故岩城宏之指揮オーケストラアンサンブル・金沢と R.V. ウィリアムスのテューバ協奏曲を共演。近年は指揮の機会も多く、上越交響楽団、新潟市・北区フィルハーモニー管弦楽団、上越市民吹奏楽団等で活動を行う。上越文化会館での創作音楽劇「くびき野の歌」、北区オリジナルミュージカル「春のホタル」、南区音楽祭プロジェクト「ヘンゼルとグレーテル」等の指揮も務める。現在、上越教育大学大学院学校教育学研究科専任講師。



コンサートマスター

Samizo Ken-ichi 三溝健一

長野県松本市にて4歳よりヴァイオリンを始め、正岡紘子、天満敦子、山岡耕祐の各氏にヴァイオリンを、東京音楽大学にて井上將興氏にヴァイオリン及び室内楽を師事する。また、肥沼きよ、竹内邦光、丸山嘉夫、松本紀久雄、汐澤安彦の各氏にピアノ、ソルフェージュ、音楽学、指揮法を師事する。大学在学中から、ソロ、室内楽、オーケストラ、オペラ等、幅広い分野で演奏活動を行う。殊に室内楽では「ENSEMBLE“ 藝弦 ”」(弦楽合奏)と「室内楽“EAU”」(ピアノアンサンブル)を中心に研鑽を積み、現在は「音泉室内合奏団」を主軸に活動を展開、編曲も多数手掛けている。また、関東～信越各地の市民・学生オーケストラにおいて指導者として活動の発展に尽力、初心者から専門課程の学生及び演奏家の個人レッスンや室内楽のグループ指導など広く後進の育成にもあたっている。

足立シティオーケストラ/常任コンサートマスター、副指揮者。松本交響楽団/客演コンサートマスター、副指揮者。上越交響楽団、柏崎フィルハーモニー管弦楽団、他/客演コンサートマスター、トレーナー。音泉室内合奏団/ソロ・コンサートマスター、音楽監督。池袋音楽学院講師。“Gruppo Violini” 主任講師。



プログラム&曲目解説

■サン＝サーンス／交響詩「死の舞踏」

フランスの詩人アンリ・カザリの詩から着想され 1874 年に作曲された、サン＝サーンスの 3 番目の交響詩です。

ハロウィンの夜、教会の鐘を現すハーブが 12 の音符により「亡霊の時間」を告げると、暗い墓場に死に神が現れ、かかとで墓石を叩きます。死に神が手にしたヴァイオリンの音頭で、あたりの墓の口が開いて大勢の骸骨が集まってきます。低音から引き出された数小節の後、奇々怪々な踊りが始まります。踊りが高揚してくると、グレゴリオ聖歌の終末（死）を表す「怒りの日（Dies

irae）」の旋律が現れクライマックスに達した後、オーボエの表す一番鳥により夜明けが告げられると死に神は崩れ去ります。一息ついて静まり夜明けの微光のなかで墓場の悪夢は消えてゆきます。

独奏ヴァイオリンの変則調弦（E 線を半音低くする）の音色により死に神の不気味さを際立たせたり、骸骨同士の当たる音を木琴で表現したりするなどの描写的な工夫が凝らされています。

■チャイコフスキー／バレエ音楽「くるみ割り人形」作品71から

三大バレエ音楽のひとつであり、作曲家晩年の作風がしっかりと表現されています。バレエの構想はロシア皇室劇場によるもので、クリスマスの晩に主人公クララの家で繰り広げられる人形のパーティの様子を綴った夢物語です。チャイコフスキーは当初バレエにあまり気が乗らなかったようです。子供ばかりが登場する上、第 2 幕は喜遊曲中心で劇的な展開がなく、しかも台本には主人公がお菓子の王国に行った後の結末が書かれていないためです。ところが 2 か月間の欧米旅行を挟んで、帰国後 1 か月足らずでバレエの下書きを終えてしまいます。それには深い理由がありました。

旅行中に目にしたパリの新聞記事で、実妹アレクサンドラの死を知ります。彼女は早くに亡くなった母親代わり家族を支えてきた人物であり、嫁ぎ先の家庭はチャイコフスキーにとって第 2 の故郷でした。彼は手紙にこう書いています。「彼女の死について考えると、遠い過去の記憶のように苦痛を感じる」。14 歳で最愛の母を失ったチャイコフスキーは、その想い出をアレクサンドラの死に重ね合わせたのでした。第 2 幕に「悲愴」交響曲のような下行音階が現れるのは偶然ではなく、アレクサンドラへの追悼であり、幸福だった幼年時代への思いを秘めていると言われています。

本日はバレエ音楽から次の 7 曲を抜粋して演奏します。

<小序曲>

編成から低弦が除かれており、バレエ全体のかわいらしい曲想を感じさせます。

<第 6 曲 情景 クララとくるみ割り人形>

時計が夜 12 時を打つと魔法が始まり、クララの体が人形ほどの大きさになってしまう様子を表します。

<第 12 曲 d) トレパーク ロシアの踊り>

ロシアの男性の踊りで、短いリズムが無限に繰り返され最後は熱狂的なプレスティッシモに達します。

<第 13 曲 花のワルツ>

木管による序奏とハーブのカデンツァやホルン 4 本による高貴な主題など色彩的で優雅なワルツに対して、中間部で悲痛的な旋律が切々と歌われます。

<第 14 曲 a) パ・ド・ドゥー／イントロダクション>

全奏による下行音階の反復が特徴的です。

<第 14 曲 c) パ・ド・ドゥー／第 2 変奏 こんぺい糖の踊り>

お菓子の国の女王の踊りがチェレスタの音で表現されます。

<第 15 曲 終わりのワルツと大詰め アポテオーズ>

パーティの参加者全員による豪華なワルツで幕が閉じられようとする瞬間、突然オルゴールのような音色で美しい夢から醒めた後の切なく名残惜しい気分と共に結ばれます。

■ 休憩 ■

■チャイコフスキー／交響曲第4番 へ短調 作品36

この交響曲は 1876 年冬から翌年 12 月までの約 1 年をかけて書き上げられました。この時期はチャイコフスキーの人生において劇的な出来事が続いており、作曲に少なからず影響があったと考えられています。

まず、モスクワ音楽院でチャイコフスキーの講座の受講生ヨーゼフ・コーテクの溺愛、そしてコーテクを通じて、資産家の未亡人ナジェダ・フォン・メック夫人と交流を持ち始めたのもこの時期です。ほどなく互いによき理解者となり、パトロネスと作曲家の親しい関係が築かれました。一方、メック夫人との手紙のやり取りが盛んになった頃に面識を持った、アントニーナ・ミリュコーバと 3 ヶ月後に結婚。そしてわずか 20 日後に別居、逃げるように国外に出て、そこでようやく頓挫していた第 4 交響曲を仕上げることができました。こうした時期に味わったであろう悲喜こもごもを想像すれば、冒頭から終楽章への流れに「運命の克服」を感じ取ることができます。チャイコフスキーは第 4 交響曲の出来に大いに満足し、完成後にメック夫人へ送った手紙で「この作品は質感や形式の点で飛躍の第一歩となったと確信します」と自覚しているように、後期作品の端緒を開く作品になっています。

チャイコフスキーは 6 曲の交響曲の中で唯一作品の標題を明らかにしています。初演後に献呈者のメック夫人に宛てた手紙の中で、次のように大まかな流れを説明しています。

第 1 楽章 アンダンテ・ソステヌート 3/4 拍子 へ短調

冒頭のファンファーレは「全体の核となる楽想<運命>。幸福に向かおうとしてもその実現を阻む運命の力。」半音階的に

下行する第 1 主題は「憂鬱で希望を失った感情が激してゆく。」第 2 主題では「もはや現実逃避し夢想するしかなく、どこからともなく甘美な白昼夢が漂う。」しかし終盤で再び「運命が白昼夢から目覚めさせる。かくして人生は幸福のはかない夢と、過酷な現実との果てしない交代なのである。」

第 2 楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ

2/4 拍子 変口短調

「悲しみの別の顔。」「仕事に疲れ本を手にとり座っているが、知らぬうちに落としてしまう。そんな夕暮れの感傷。」中間部では「血気盛んな若かりし頃の幸福を思い出す。」

第 3 楽章 スケルツォ：ピチカート・オステナート・アレグロ

2/4 拍子 へ長調

この楽章では「特別な感情は表されていない。」「自由な想像力で、眠りかけたときに明滅するようなイメージを思い浮かべる。」

第 4 楽章 終曲：アレグロ・コン・フォーコ 4/4 拍子 へ長調

「自分なりの喜びを見出せないのなら、周りを見渡し民衆の中に入りなさい。彼らはなんと楽しげであろうか。民衆の祭りのイメージ。再び運命の力で我に返らされても、誰もその悲哀に気付かない。この世の全てが悲しいなどと言ってはならない。喜びを分かち合いなさい。そうすれば生き続けることができる。」祝祭的な序奏を挟みながら、第 1 主題（ロシア民謡「白樺は野に立てり」）と陽気な第 2 主題が交互に繰り返され、一瞬「運命」の楽想が影を投じるが、続く華やかなコーダが一切を払拭し幕となる。

出演者

*は賛助出演ならびに団友

コンサートマスター

三溝 健一

第1 ヴァイオリン

上野 圭子
小菅 宏造
坂口 和久
田村 さやか
橋本 士郎
平原 良晃
横田 幸恵
岩田 貴守*
熊田 美也子*
寺島 さつき*

第2 ヴァイオリン

青木 由美子
泉 紀子
加藤 昌子
高松 理恵
竹澤 敏江
田中 教生
藤原 満
石津 忠*
本間 久貴*
八國生 紗也乃*

ヴィオラ

岩下 律子
清水 哉子
古海 法雲
渡辺 みほ
大木 理絵*
大庫 るい*
宮入 徹*
横田 裕祐*

チェロ

池田 なつき
稲井 進
上野 敦子
大坪 美樹
笠野 恭子
加藤 史子
佐藤 慎悟
高橋 文子
水澤 由紀

コントラバス

秋山 雅央
吉崎 須賀子
渡辺 光
庭山 佳代*
松原 直之*
山崎 康正*

フルート

齊藤 孝久
丸山 恵理
森澤 拓
森田 真衣

オーボエ

羽賀 純子
橋本 直子
皆川 正弘
皆川 未央

クラリネット

齊藤 直美
鈴木 和久
富田 洋加
渡辺 英雄

ファゴット

福嶋 梓
宮口 弘明

ホルン

笹川 修一
島岡 美沙
須田 孝義
森 真人
綿貫 英紀

トランペット

菅野 徳嗣
海野 匡代*
西山 岳志*

トロンボーン

笠野 光雄
松田 彰英
柳澤 淳

テューバ

若井 一也*

パーカッション

稲田 善智
加藤 正之
中原 健二
綿貫 佳子*

チェレスタ

横尾 亜希*

ハープ

上田 智子*

楽団紹介

1972年(昭和47年)結成。毎年2回開催している定期演奏会、各方面からの依頼演奏や行事への参加を通じて、広く市民に愛されています。

上越市を中心に、県内各地から音楽を愛する仲間が集い、質と達成度の高い音楽を表現すべく、様々な楽曲に挑戦しています。

ことに近年は上越市ゆかりの方との共演を果たしています。2012年、大越さとみ氏を招き、白鳥の湖(ナレーション付)を、翌2013年は牧田由起氏を招き、ブルッフのヴァイオリン協奏曲を披露、好評を博しました。

現在は指揮者に上越教育大学の長谷川正規氏、コンサートマスターに三溝健一氏を迎え、充実した活動を展開しています。



■ 次回演奏会のご案内 ■

第74回定期演奏会

日時：2015年3月8日(日)14:00 開演

会場：上越文化会館 大ホール

ワーグナー/「ローエングリン」第1幕への前奏曲
第3幕への前奏曲

ブラームス/悲劇的序曲
ブラームス/交響曲第2番

■ 団員募集のご案内 ■

上越交響楽団では団員を募集しております。
通常オーケストラで演奏される楽器であれば、どなたでも入団できます。
素敵で愉快な仲間達と素晴らしい音楽を創りましょう。
団員一同、心より歓迎いたします。

連絡先 Mail: mako2034@joetsu.ne.jp

Tel: 090-1606-1254(茨木)

ホームページ <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~jsovn/>